

保育における環境構成

— 保育実習との関連を視野に入れて —

松 井 愛 奈

1. 環境を通して行う保育の重要性と環境が子どもの行動に与える影響

幼稚園教育要領や保育所保育指針において、環境を通して行う保育の重要性がうたわれ、子どもが自発的、意欲的に環境に関わり、様々な経験を積んでいけるよう計画的に環境を構成することが求められている。保育の環境には、保育者や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、自然や社会の事象などがあり、人、物、場などの環境が相互に関連しあっている。子どもが園環境のなかで暮らし、日々を過ごすこと、その過ごし方における形と経験が場所を構成し、逆に、場所がその形と経験を規定する（無藤, 1995）。実際、子どもは質的、量的に異なるやり方で環境とかがかわっており、物の量、型、配置（Phyfe-Perkins, 1980）、人数、空間要因（Shugar&Bokus, 1986）は、子どもの行動に影響を与えている。なお、人的環境については、子どもの成果や遊びを支える保育者の援助としてさまざまな視点から数多くの研究があり、人への注目は従来からよくなされてきたが、それに比べて物に関する検討が不足していることが指摘されている（無藤, 2010）。以上のことから、本論では、保育環境のうち主に物的環境に焦点を当てて論じていく。

(1) 建築学的な視点

子どもたちが遊びやすい空間には遊環構造（循環機能があること、その循環の道が安全で変化に富んでいること、その中にシンボル性の高い空間、場があること、その循環に「めまい」を体験できる部分があること、近道[ショートサーキット]ができること、循環した大きな広場、小さな広場等がとりついていること、全体がポーラスな空間で構成されていること）があり、多数の穴が開いていて様々な所から出入りできるポーラスな空間があることで子どもたちの動きが活発になり、遊びが生まれやすいことが指摘されている（仙田, 1992）。

また、幼児施設で幼児の滞留行動が起りやすい場所には高所（高いところで幼児の視線が変わるところ）、別所（平面的であっても区画され、他の部分から差別化されたところ）、閉所（囲われて閉鎖的な場所）があり、それらの種類、位置、規模によって滞留行動は異なる（仙田, 1998）。

空間利用については、山田・佐藤・山田（2009）により以下のことが見出されている。コーナーは必要面積が確保される範囲で小さいほど空間が有効活用され、一定の面積を超えるとコーナーが大きくても活動面積はそれほど増えない。子どものコーナーからのみ出しは、遊びの種類では「積み木」に多く「レール」にも複数見られ、コーナー型では鳥型、直線型、L型

に複数みられ、「積み木」や「レール」は拡張性の高い遊びであり、特に「レール」は広い面積を必要とするため、はみ出しの距離も大きくなる。また、設え・家具から90cm程度までの距離感が子どもにとっては安定感がある。

(2) 園環境改善・再構築の視点

園舎や園庭環境を改善・再構築することに伴い、子どもの遊びや行動がどう変化したかに焦点を当てた研究もある。福田・無藤・向山(2000)によると、園内を閉鎖空間から開放空間に変えたこと（窓を作り光と風を入れる、壁やはめ込みの窓を出入り可能にする、大小の階段を新設するなど）で、園舎内に循環性が生じ、子どもの動きが活発になった。また、2階テラスから園庭で遊ぶ子どもの様子を見ておもしろそうだと感じるとすぐに靴を替えて庭へ出られることや、通行によって遊びを中断されることが少ないことで面白い遊び場としての特徴が生かされることの重要性も指摘されている。

園庭環境において、①移動する遊びと空間的に安定した遊びの拠点との葛藤、②デッドスペースの存在、③固定遊具の配置が起す動線上の問題、④遊びに取り込める自然物の不足を改善するため、遊びの場としては活用されていないデッドスペースに幼児の滞留を可能にする特別な空間（ウッドデッキ）を作り、必要に応じて遊びの拠点として活用できるようにしたところ（河邊，2006）、複数の空間を子どもが循環できるように、保育室内での遊びの延長・拡大として園庭にも遊びの拠点を求めるようになった。

また、0歳児クラスで畳が一面に敷かれた単一空間にコーナーや仕切りを設けて、空間構成を変更したところ、月齢差やタイプなどによって個人差、その他の影響もあるが、空間構成の変更以降、自由遊びの時間において、子どもが

活動する割合は高くなり、落ち着いて遊ぶようになるだけでなく、遊びに集中し、じっくり遊ぶようになった（村上，2009）。

園環境の何が改善されるべきかについて、無藤・倉持・柴坂・田代・中島・柴崎（1993）は、以下の4点にまとめている。①子どもが自分の場所を持つということ：その園環境の中のどこかにおいて、一人の子どもが安心していられる場所や、集中し打ち込める場所が必要である、②様々な人や物、動物や植物が集い合う場所であること：多様な意味が成り立ちやすくなり、また季節に応じた変貌が可能となる、③本物と出会うということ：子どもが日々の生活で出会う本物の活動や本物の対象が園の中でもっと強調されてよい。本物の生きた植物や動物とともに、料理や木工のような本当の道具を使った、そしてその成果がまさに本物としか言えないような活動が強調されてよい、④子どものイメージの可能性を広げること：子どもが展開するイメージというものが様々に繰り返され、イメージの間の交流が可能であること、園の中にある様々な環境要素の上には重ねられる形で、子どものイメージが想像され、きらめくことが必要である。そのためには様々な環境要素が豊かに用意され、また、それに対してじっくりと関わるのが保障されなければならない。

(3) 保育室、テラス、屋外の環境構成

保育室は屋外へのアクセスのしやすさが重要であり、テラス・前庭と周辺環境のアクセスに配慮し、屋外空間へ出向ききっかけを与える必要がある（藤田，2004）。なおテラスは、屋内の延長として気軽に出てきてまた戻ったり、外をのぞいて下りていったり、外と内を結ぶ中間的な場としての役割を果たし（福田ら，2000）、テラスに滞在することが屋外へ出向ききっかけ

となる（藤田，2004）。

藤田（2004）によると、屋外の環境には定点遊びの拠点（遊びコーナーを屋外に配置し、周囲の前庭、高低差、花や植物等の魅力により遊びの展開が期待される）、流動的遊びの拠点（ある遊びの拠点を中心として遊びを発展させるために周囲の要素に働きかけるもの。拠点の魅力を引きだす周辺物的要素、水回り、自然素材の充実が必要）が重要であり、子どもの遊びの拠点周辺の物的要素が遊びの展開に関わっており、物的要素の近接配置により遊びがネットワーク的に拡がる可能性がある。砂場については、保育室や流動的遊びの拠点、場の境界、水周りとの連携が課題となり、砂場を拠点として周囲の物的要素に働きかける流動的遊びもみられる。屋外オープンスペースについては、鬼ごっこ等で場所を移動する場合に物的要素の近接による線的な動きの発生や、高低差による遊びの深化が課題となる。

園庭のようなオープンスペースでは、広がりは自由であるという感覚と密接に結びついており、そのような広々とした場で子どもは喜んであちこちと走りまわるものである（Yi-Fu, 1993）。また、園庭空間に展開する幼児たちの間に全体的盛り上がりがあるためには、そこに自由な雰囲気为保障するために、第三者の目で客観的に見れば無秩序で雑然として混乱したカオスの雰囲気、賑わいが生まれることが必要である（小川，2010）。

(4) 環境による遊びの誘発

歴史的に伝承・保存された環境と、その環境を通して行われる遊びがセットになって継承されている遊誘財は、子どもの遊びを強く導く力をもっており、優れた遊誘財は遊びを誘発する（佐々木，2009）。そして、集積された事例記録をもとに、遊誘財データベース（I砂・土・泥・

水など、II植物・動物など、III造形遊具・玩具・教材など、IV記念物など、V表現文化、VI生活文化、VIIその他）構築が進められている（鳴門教育大学附属幼稚園，2009；2010）。

園庭において幼児を遊びへと誘う誘発要因には①設備や道具によって遊びが導かれている「遊具・道具性」、②場を構成している材料、形態によって遊びが導かれる「素材・素形性」、③自然構成物（水、木、土等）によって遊びが導かれる「自然性」、④人だまりをつくって遊びが導かれる「たまり性」、⑤隠れ場のようにして遊びが導かれる「隠れ場性」、⑥拡がりのあるスペースによって遊びが導かれる「オープンスペース性」、⑦移動しながら遊びが連続的に展開される「遊び回遊性」が見出され、ひとつの遊びの場の中に複数の要因が見出されている（横山，2003）。

(5) 子どもが捉えた園環境

子どもが写真撮影した「幼稚園の中で好きなところ」と撮影理由のインタビュー、写真撮影時の子どもの様子から子どもがどのように園環境をとらえているのかについて検討した研究によると（中島・山口，2003）、子どもにとって自然物が大事な環境であること、環境への意味づけは園生活の中で自分なりになされ子どもによって異なること、季節や物的環境の変化の影響も受けていることが見出されている。

(6) 環境の安全性と子どもの自由な活動

安全性は保育環境において当然の条件である。遊具や用具の安全なかわり方や、安全な動きを体得するためには、保育者が生活の場や遊具の安全点検と確認を心がけ、安全のポイントや園の約束を保育者が伝えと同時に、子ども自身が危険な遊びに気づき、危険を回避する力を身につけることが重要である（永井，

2009)。ただし、安全管理の過剰な配慮は、園児の冒険心を満たす機会を奪い去る可能性があり、平坦な地面や安全な遊具を配置することで、画一的で退屈な空間が形成されてしまうため子どもが危険性を認識できるようになしつらえや、この場が自分にとって危険かどうかを認識できるような配慮が必要である（藤田，2004）。また、保育者が安全対策を施しながら、子どもたちにも安全につながる身体の使い方を指導することにより、安全と動きやすさを備え合わせた自由な活動が可能となり、子どもたちが場所に慣れることによって、各場所の特徴をつかんでいく（福田ら，2000）。

2. 環境構成と仲間関係・遊び内容との関連、自分の場所としての環境

(1) 仲間関係との関連

河邊（2006）は、空間はその特性によって遊びを誘発することは確かだが、それだけで充実した遊びが展開するわけではなく、空間を意味づけるのは幼児自身であり、構築上の特性を幼児がどのように受け止めて場を見立て、それを仲間とどのように共有しながら遊びを展開しているのかを注意深く見極め、必要な援助の手立てを講じていかなければ遊びは持続的にならないことを指摘している。また、ままごとや積み木などのコーナーは、人とモノと空間がリンクしており、モノとのかかわりや、場づくり、人間関係が一緒にならないと遊びにならない（小川，2010）。

つまり、ある物的環境とそこで生じる子どもの表面的な行動を捉えるだけではなく、どのような仲間関係により、どのような遊びが展開されているのかについて詳細に検討する必要がある。

(2) 遊び内容との関連

松井（2001）は、周囲の環境が子どもの行動に影響を与え、そこで展開する遊び内容は異なることをふまえ、幼稚園で特徴的な遊び場面①区画／コーナー遊び：園に備え付けて場の閉鎖性が高く、他の遊び場面と区切られた高所・別所・閉所で、組み立ての必要がない、②組み立て遊び：物自体に可塑性はないが組み立てることが必要、③砂遊び：可塑性の高い砂や水を使う、④躍動遊び：動きが動的なもの、⑤ルール遊び：ルールが優先するもの）と仲間への働きかけとの関連性を検討し、以下のことを見出している。①区画／コーナー遊びは、他と区切られた場所でごっこ遊びが行われることが多く、遊びの展開状況をすぐに理解することは難しい。また参加には役が必要であるため、4歳児で遊び内容に沿った働きかけは少なく明示的な仲間入りが多く、②組み立て遊びでは、材料の運び出しや組み立てによりメンバーの出入りが多く、ごっこ遊びが並行していることも多いため、4歳児で注意のひきつけや明示的な仲間入りが多く、③砂遊びは、オープンスペースで砂や水を使う活動であり、3歳児で呼びかけ、自分の活動提示、相手が必要なものを与えるなど暗黙的な働きかけが多い、④躍動遊びは、動的な活動であり、3・4歳児で仲間と同じような動きにより入っていくことが多い、⑤ルール遊びには、一定のルールや秩序があり、4・5歳児で明示的な仲間入りが多く。

製作コーナーについては、子どもが製作のスペースに集中できるように、壁を背にして机が横長に配置されていることで安定感を保ち、部屋の中央にコの字形に開かれていることが望ましく、縦長であると部屋の中央に向かって開かれたスペースから外へと出て行きたくなる衝動が強くなり、落ち着かない（小川，2010）。

砂場は、人や物（道具や水）の行き来が極めて容易であり、内外の活動を見聞きでき、全体

として砂にかかわる動き自体が中心となって遊びが持続的であるため、一定の人間関係が形成される機会になる（無藤, 1996b）

(3) 自分の場所としての環境

空間は名づけられることによって人間に承認され、場所は外部とは何か異なるものとして経験され得る「内側」を有しなければならず、単に位置や外見によって記述できるような明確に独立して定義される実体としては経験されない（Relf, 1999）。場所を知り、関わるとは、その中に入り、所属し、自らを開き、意味を感じとっていくことであり、どのような見かけであるかは大事な場所の要素だが、そこに馴染むことを通して、より深いものを場所として感じとるようになる（無藤, 1995）。Yi-Fu (2008) は、人と場所あるいは環境との間の情緒的な結びつきのことを「トポフィリア（場所愛）」と呼んでいる。

つまり、子どもが単純にそこにある物的環境にかかわる場合と、物的環境とのかかわりを（1人で、あるいは仲間とともに）積み重ね、そこに特別な思いや愛着が生まれる場合とでは、子どもにとっての環境の意味が異なり、そこで経験される内容にも違いが生じるということである。単純にそこにある物を使うといったような表面的なかわりしか生じない環境なのか、トポフィリアとして自分の場所として存在する環境なのかを把握する必要がある。

3. 園環境のあり方

無藤ら（1993）は、園の環境構成において重要な原則として以下の3点を挙げている。①分節する空間：様々な形で区切られ、遊びの発展、面白さの展開という面からみると、集中が可能でありながら、時にはしばしばお互いの空間の

交錯と交流が可能であること、②変貌する空間：空間の中に様々な形で驚きがあり、また、空間要素そのものが発展し子どもの遊びを刺激することが必要である。環境が豊かであるということは、様々な要素が少しずつ変貌し、成長を遂げていくことである、③構成する空間：環境が与えられたものとしてあり、それを使いこなすということではなく、まずその環境要素が様々なあって、そこから子どもが選び出し、組み合わせることが可能でなければならない。選び出すだけではなく、環境要素そのものを子どもが作り出し、様々な形で後に残るように子どもが作り出せることである。

アンケート・視察・観察調査を通して得た結果をふまえ、保育所の環境・空間について「機能面」に着目した研究（全国社会福祉協議会、2008）によると、「機能」として①登園・降園のための機能（登園・降園）、②子どもの生活・あそびのための機能（食事、睡眠・休息、排泄、屋内あそび、屋外あそび、障害のある子どものための環境）、③保護者支援のための機能（保護者支援）、④地域の中で果たすべき機能（地域における子育て支援、社会的役割としての保育所）、⑤保育所運営のための機能（保育所運営のための空間）、⑥共通事項（安全・衛生、光・空気・音環境）を挙げ、その望ましいあり方がガイドラインとして整理されている。また、食事から午睡にかけての一連の生活の流れがスムーズに行われることの重要性、および子どもが食事の最中に移動させられることなどは避けるべきであること、布団を用意する際に非常に多くの粉じん量が測定されたことなどから、本来、保育において食事の場と午睡の場を分ける食寝分離が基本とされるべきである。しかし、乳児保育室においては食寝同室の割合が全体の4分の3、3歳以上児保育室では食事と午睡を同室で行っている場合は全体のおよそ6

割にのぼる。現在の保育所に関する最低基準は、保育を行うことが不可能という状況ではないものの、「食寝分離」などさまざまな課題があり、現行の基準以上の面積が必要である。観察調査により得られた保育実践行為や集団規模における活動、動作空間と単位空間という建築設計の考え方で単位となる面積をもとに、観察調査等により空間の必要性を確認したうえで算出された面積基準は、2歳未満児は4.11 m²/人以上（ほふくや遊びのために必要な空間が含まれておらず、この面積に加算して考えることが必要）、2歳以上児は2.43 m²/人以上（食事や午睡の専用室を設け、遊びの際に食事と午睡の空間を利用しない場合には、遊びの空間[1.99 m²/人]とともに、必要な食事の空間1.03 m²/人または午睡の空間[1.40 m²/人]を確保することが必要）である。

保育所の最低基準は、諸外国に比べてもかなり低く、子ども1人あたりの面積や、保育士1人あたりの子どもの人数についても、子どもの最善の利益が保証されているとは到底言い難い。待機児童解消を銘打って、単純にその数を減らすことだけを目的に基準緩和を行うことは言語道断であり、保育の質の向上を目指して基準を高める方向で検討されるべきである。

4. 本来の想定とは異なる非典型的な環境利用、子どもが作りだす園環境

園の空間にあるどの要素も子どもが見たり使ったり探索したりしており、本来の想定とは異なる使われ方が見られる（無藤ら、1993）ことや、本来通路ではない場所を子どもが繰り返し通って道になった子ども道（福田・無藤・向山、2002）など、子どもが大人にはない発想で環境を利用し、子どもが独自に環境を作り出すという事実が見出されている。子どもが見出す

独自の道は、どれも確かに通過するが、通過自体が困難を抱えており、不自由さを含みながらそれを乗り越えるところが面白く、思いがけない変化を伴うのでその意外性が好まれるのではないかという見解がある（無藤、1996a）。

子どもの遊びにはカリキュラムに記載されるような名前のついた遊びだけではなく、大人が思いつかないような常識離れた名前がつけられない「名のない遊び」も多数あり（塩川、2006）、従来の遊び研究の枠組みから外れる遊びに目を向ける必要性が示唆されている。それらの名のない遊びは子どもが自分の興味関心に突き動かされて自発的に始めるものであり、発達において非常に重要なものであるにもかかわらず、大人の理解を超えるものであるために認められることが少なく、制止されたり怒られたりすることさえある（塩川、2006）。そういった遊びの中にも、本来の想定とは異なる非典型的な保育環境の利用例が挙げられており、子どもが既存の物の特性に縛られず、創造性を発揮し、子ども自ら保育環境をつくり出していると言える。そのような子どもの保育環境とのかかわりを検討することによって、子どもの視点からみた環境の意味やおもしろさ、子どもが主体的に興味関心をもって探求でき、子どもの好奇心を満たす遊びを生み出す環境の様相、これまで見落とされてきた保育環境のあり方を見出すことが可能になるだろう。

5. 保育実習との関連

保育者を目指す学生にとって、保育における環境構成について十分に学び、理解することは重要な課題のひとつである。上述したように、一口に環境と言っても、人的環境、物的環境、自然環境、社会環境など多種多様なものがあり、言うなれば、子どもにとっての環境とは子ども

が生きる世界のすべて、子どもが見聞きし、接し、感じるものすべてである。子どもの年齢や個人差によってそのときに必要な環境は異なる上、環境は一度構成したらそれで終わりではなく、目の前の子どもの姿に応じて臨機応変かつ柔軟に再構成していくことが求められる。そういった様々な要素が複雑に絡みあいつつ、子どもの最善の利益を保障する保育環境のあり方を理解し、自分のものとすることは容易ではない。

保育者養成のための教育は、講義と実習が並行して行われる。講義のなかで保育の環境構成に関する理論についても学び、知識として身につけていく。しかし、頭で分かっていることと、実際に自分のものとして身につく実践できることは別問題である。実習により保育現場に入って初めて、理論と実践のずれや難しさを感じることもある。また、講義では伝えにくく、直接保育環境を目の当たりにし、経験することで理解できる(あるいはその方が理解しやすい)こともある。さらに、保育現場において実際に動き、自分自身も人的環境として実践することにより初めて講義で学んだことが腑に落ちることも多いだろう。

実際に保育者養成コースに在籍する学生の姿を見ていても、実習前後では講義の理解度やコメントの内容、言動にも変化が生じることが多い。実習を終えて、これまで漠然としていた講義内容の重要性が分かることもあるようだ。保育におけるPDCA(Plan: 保育の計画→Do: 保育実践→Check: 評価、省察→Action: 改善)に沿いながら、目的意識をもって入念な準備のうえで実習に取り組み、実習の振り返りを通して学びを整理し、次への課題を明らかにし、実習の経験を積み重ねることによって学びが深まっていく。

文献

- 藤田大輔 2004 園児の遊び実態からみた幼稚園の屋外空間構成に関する試論. 日本保育学会大会研究論文集(57). 2-3
- 福田秀子・無藤隆・向山陽子 2000 園舎の改善を通しての保育実践の変容I. 保育学研究. 第38巻第2号. 87-94
- 福田秀子・無藤隆・向山陽子 2002 園舎・園庭の改善を通しての保育実践の変容(III): 研究者と保育者によるアクションリサーチの試み. 日本保育学会大会研究論文集(55). 786-787
- 河邊貴子 2006 園庭環境の再構築による幼児の遊びの新しい展開—ウッドデッキの新設をめぐる—. 保育学研究. 第44巻第2号. 139-149
- 松井愛奈 2001 幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連. 教育心理学研究. 第49巻. 285-294
- 村上博文 2009 乳児保育室の空間変成と“子ども及び保育者”の変化—K保育所0歳児クラス:自由遊び時間におけるアクションリサーチ— 東京大学大学院教育学研究科紀要. 第49巻. 21-32
- 無藤隆 1995 トボスにおける発達 第1回. 幼児の教育. 94(4). 24-31
- 無藤隆 1996a トボスにおける発達 第9回. 幼児の教育. 95(8). 41-49
- 無藤隆 1996b トボスにおける発達 第10回. 幼児の教育. 95(10). 34-41
- 無藤隆 2010 2012年『保育学研究』第50巻特集論文原稿の募集●特集テーマ「保育実践と保育環境」. 日本保育学会会報No.147.
- 無藤隆・倉持清美・柴坂寿子・田代和美・中島寿子・柴崎正行 1993 園環境は子どもにとってどのような意味を持つか. 保育学研究. 第31巻. 113-122
- 永井孝子 2009 心身の健康に関する育ちと活動. 無藤隆・増田時枝・松井愛奈編 保育の実践・原理・内容[第2版]—写真でよみとく保育—. ミネルヴァ書房. 44-59
- 中島寿子・山口雅史 2003 幼稚園の中で好きなのは?—子どもの視点から園環境を考える試み—. 西南女学院短期大学研究紀要第49号. 51-61
- 鳴門教育大学附属幼稚園 2009 保育の質的充実を目指して—遊誘財データベースの構築にむけて—. 研

究紀要第43集.

鳴門教育大学附属幼稚園 2010 保育の質的充実を目指して—遊誘財データベースの構築— 研究紀要第44集.

小川博久 2010 遊び保育論. 萌文書林.

Phyfe-Perkins, E 1980 Children's behavior in preschool settings—A review of research concerning the influence of the physical environment. In L.G. Katz (Ed.), *Current topics in early childhood education* Vol.3. Norwood, NJ: Ablex. Pp. 91-125.

Relf, E. 1999 場所の現象学. 高野岳彦・阿部隆・石山美也子(訳) ちくま学芸文庫.

佐々木宏子 2009 保育者のための遊誘財データベースづくりから見えてきたこと—保育の質を語るための新しい保育専門用語の開発—. 保育の質的充実を目指して—遊誘財データベースの構築にむけて—. 鳴門教育大学附属幼稚園研究紀要第43集. 巻頭言.

仙田満 1992 子どもとあそび. 岩波新書.

仙田満 1998 環境デザインの方法. 彰国社.

Shugar, G.W., & Bokus, B. 1986 Children's discourse and children's activity in the peer situation. In E.C. Mueller & C.R. Cooper (Eds.), *Process and outcome in peer relations*. London: Academic Press. Pp.189-228.

塩川寿平 2006 名のない遊び. フレーベル館.

山田恵美・佐藤将之・山田あすか 2009 自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究. 日本建築学会計画系論文集. 第74巻第637号. 549-557

Yi-Fu Tuan 1993 空間の経験. 山本浩訳 筑摩書房.

Yi-Fu Tuan 2008 トポフィリア. 小野有五・阿部一訳 ちくま学芸文庫.

横山勉 2003 園庭における幼児の遊び空間に関する研究. 園庭の遊びの誘発要因分布 日本建築学会北陸支部研究報告集. 第46号. 303-306

全国社会福祉協議会 2008 機能面に着目した保育所の環境・空間に係る研究事業総合報告書.